京都は、「脳内リゾート」できる“現場”があふれるまち

大政奉還150周年を迎えた京都。幕末維新の史跡が数多あるまちを歩く楽しみについて、著作のほかテレビ番組等でも大人気の歴史学者、磯田道史さんに語っていただきました。

歴史学者
磯田 道史さん

──ただいま三度目の京都暮らし中という磯田先生、京都の魅力はずばり何でしょう？

やはり、歴史の現場が至るところで見られることですね。19歳で初めて住んだ時は嬉しくてそこらじゅう歩き回りました。中でも、坂本龍馬の命日のその時間に暗殺現場の近江屋跡に行ってみて「こんな寒い日だったのか」とか、供えられた桔梗の花に「龍馬の家紋にちなんで？」と感じ入ったり。やす寺（松林寺、上京区）で感心したのは龍馬を斬りに行った京都見廻組が登った石段が、いまも残っていること。また醤油商・近江屋の面影を求め、澤井醤油本店（上京区）を訪れたことも。事件とは無関係ですが、この店では龍馬の頃の樽が今も現役。当時を偲ぶ空間が京都にはたくさんありますよね。幕末維新期の現物なら霊山歴史館（東山区）に行けば見られるし、黒谷さん（金戒光明寺、左京区）には会津藩駐留の痕跡も。一方、まちなかの石段やお寺の壁などが赤茶けているのを見つけて「これは“鉄砲焼け”＝禁門の変（蛤御門の変。1864年）の時のものだな」なんて、マニアックな楽しみ方ができるのも歴史の現場である京都ならではです。

──「禁門の変」関連で、とくにお薦めの場所はありますか。

必ず見ていただきたいのは、京都御所の蛤御門。戸板や柱に火縄銃の弾や矢が突き刺さった痕が残っています。このとき御所の中には西園寺公望がいたかもしれないと思い、彼の回想録（『陶庵随筆』）を読んでみたら、やはり長州藩が放つ弾が御所に飛ぶさまを書いている。さらに（彼ら公家が憎んでいたはずの）会津藩主・松平容保が御所の階段に腰掛けて弁当を食べていたという記述も。

──教科書で知った数々の事件の現場を、史料を読み、さまざまな人の姿を追想しながら歩くと、ぐっとリアルに感じられるわけですね。

僕ね、実はなかなか信じない人なんです。歴史上の人物も墓を見ないと信じないんです。「蛤御門の変」と言われても、銃痕を見なければ本当にあったという思いがわいてこない。でも、そういう“現場”が京都には尽きないんですよ。

二の丸御殿式台 老中の間 杉戸絵

大政奉還の舞台でもある二条城に行って驚いたのは、「老中の間」。幕末、老中の板倉勝静が詰め、薩長と対峙するとき密談した間です。息詰まる政局について論議したその部屋の杉戸に、あひるか何か、かわいい鳥の絵が描いてある。こんな牧歌的な障壁画（※）の前で腕組みしていたのだと思いながら見ると、また面白いんですよね。

さらに東大手門の扉に乳鋲（ちびょう）乳金物というおっぱい形の金具があるのですが、眺めていると僕はなでたくなる。なぜか？それは北大路魯山人（1883ー1959）を思い出すからです。彼は不義の子として生まれ、幼い頃二条城近くの店にやられる。母が恋しい彼は、この門に来ては乳鋲乳金物をおっぱい代わりに口に含んでいたとか。それを知ると、ただの鉄の塊が意味づけされ頭の中で画が動き出す。そういう見方で、京都を楽しんでいますね。

東大手門 乳鋲乳金物

これを僕は「脳内リゾート」と呼んでいます。美術家・作家の赤瀬川原平さんの言葉ですが、高いお金を出さなくても、さまざまな知識や情報を組み合わせると、その場所のリゾート力が脳内で倍加できるというもの。これは限られた時間しか持って生まれてこない人間にとって、人生の最もすてきな楽しみ方ではないかと。

──京都には「脳内リゾート」できる場所が至る所にありますね。京都や地方都市がそんな魅力をさらに発信していくには？

これまでの「ものづくり」と結合した「ものがたりづくり」が必要ではないでしょうか。歴史に立脚して、地域の文化・もの・サービスを「ものがたり」として結び、人々にいかに紹介していけるか。京都はそれを昔から比較的実行してきたまちですが、二条城などの史跡で「ものがたり」ツアーをしたら面白いでしょうね。文化で「脳内リゾート」。少々お金がなくても、環境を壊さなくても気軽にできる、ある種21世紀型の豊かな社会の形。地域の違いを楽しむ時代に、ぴったりだと思いますよ。

磯田道史　いそだ みちふみ

1970年岡山市生まれ。2002年慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程修了。2016年国際日本文化研究センター准教授。著作『武士の家計簿』で第2回新潮ドキュメント賞、2010年第15回NHK地域放送文化賞、『天災から日本史を読みなおす』で第63回日本エッセイスト・クラブ賞を2015年受賞。近著に『「司馬遼太郎」で学ぶ日本史』『徳川がつくった先進国日本』など。テレビ出演・新聞寄稿等多数で、2018年NHK大河ドラマ「西郷どん」では歴史考証にも加わる。

※二条城の障壁画原画（重要文化財）は、築城400年記念展示・収蔵館で公開（二の丸御殿内は複製を展示）。